

山口・初瀬遺跡



(山 口)

- 1 所在地 山口市大字宮野下地内
- 2 調査期間 一九九三年(平5)四月～八月
- 3 発掘機関 山口市教育委員会
- 4 調査担当者 増野淳一
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 一五世紀～一六世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

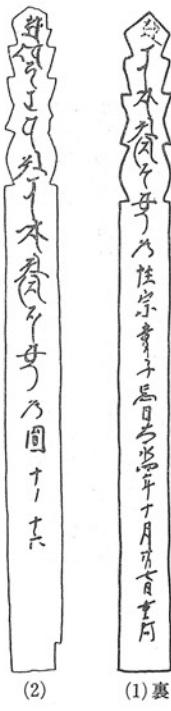
初瀬遺跡は、山口盆地北東部山麓の先端の山間部に造られた堤の縁に位置し、水位が高い時期には水中に没することもあった。中世に山口を支配していた大内氏の館跡からは北東約1kmの距離にあり、さらに遺跡から北東約400mの山麓には、雪舟邸で著名な常栄寺がある。堤の南前方の丘に初瀬観音堂がある。大内氏の時代に創建されたといふ初瀬寺は当地よりさらに

北奥の山岳にあったといわれるが、確認はされていない。現觀音堂は後に建られたものであるが、初瀬寺に祀られていたという十一面觀音像（重要文化財）が戦前まで安置されていた。

本遺跡の調査は、民間の宅地造成に伴う緊急調査として行なったものである。約九〇〇m²を発掘調査した結果、谷間の傾斜地に、四本柱の門、堀とみられる柱列が検出され、その内側に溝・掘立柱建物・円形状遺構・木囲い遺構が確認された。さらに石囲い遺構が造られた旧河川を挟んだ緩斜面で、掘立柱建物群や土坑群が検出された。

遺物は旧河川の湿地部の落ち込みを中心として多く出土した。土器は、量的には土師器の皿が最も多く、瓦質の鍋がこれに次ぐ。その他、須恵質陶器の四耳壺、龍泉窯系青磁、白磁、青花磁器、李朝陶磁器、瀬戸美濃産の天目茶碗も出土している。土師器皿には、大内氏館跡以外では出土例の稀な厚手のものや、「理超」や「涼（あるいは淨カ）本」と書かれた墨書き器もある。遺跡周辺は後世に堤として利用されたため、木製品の遺存状況も良好で、下駄・櫛・桶・漆器・羽子板状木製品などが出土している。漆器には「明」や「延」という朱漆文字がみられるものもある。

篠塔婆は堀に沿った幅一二〇cm前後の溝の底近くからまとまって出土した。この溝は排水用の溝と思われ、最終的には人為的に埋められている。(3)は旧河川の湿地部に造られた石囲い遺構の底から出



(2)

(1)裏

9 関係文献

山口市教育委員会『初瀬遺跡』(一九九四年)

(増野淳一)

土した。

その他の遺物としては、宝篋印塔、石臼、鉛製の鉄砲弾丸五個、銅錢などがある。これらの遺物からみて、この遺跡が寺院関連の遺跡であることは間違いないと思われる。

8 木簡の訳文・内容

- (1) 「**大内安三河守** 为円 十ノ十六」
 (2) 「**大内安三河守** 为円 十ノ十六」
 (3) 「**町野内安三河守**」

163×13×0.7 061

162×13×0.9 061

「町野内安三河守」

240×48×2 011

(1)(2)は筆塔婆で、計一六点出土したが、代表的なものを掲げる。長さ一六・〇～一六・四cm、幅一・二～一・四cmとほぼ同規格で、頭部は五輪塔の形に刻まれており、一六点全てに墨書がみられる。

(1)は表に死者の供養のための梵字が四種統けて書かれ、裏面には梵

字に統いて、子供の戒名、忌日、僧名が書かれている。他の一五点は(2)と同様に片面のみに供養の文字が書かれ、最後の数字のみが異なる。数字は「十六」「廿一」「廿五」「廿九」、解読不能が三点で、これは供養の日付を表すものと考えられる。

(3)の「町野」氏、「安」氏はともに大内氏の家臣として実在する姓である。札の用途は分からぬが、厚手の土師器の出土と合わせて考えると、この遺跡が大内氏と直接の関係があつたことは明確である。

(1)に書かれた「大永四年」(一五一四)は、山口では大内義興の時代である。文献によると、この頃、当地区周辺には大内盛見の女が開基した「廣徳院」という尼寺があつたと記されている。その後も大内教弘・義隆との直接的な関連もあつたようである。創建年代は記されていないが、遺跡から出土した遺物がほぼ盛見が活躍した一五世紀以降のものであり、ほぼこの記載に合致する。調査区が限定されたため寺院の主たる遺構は検出できなかつたが、この遺跡が廣徳院である可能性は高いと考える。